

## 平成二十七年年度仏教学会大会シンポジウム 戦争と鎮魂 趣意文

一九一四年六月二八日、サラエヴォで勃発した事件をきっかけに、欧州列強諸国はもちろん、同年八月にドイツ帝国に宣戦布告した日本もまた、人類史上初の世界大戦・国家総力戦の渦中に踏み込んでゆくこととなった。この事件から一世紀を経た昨年二〇一四年、そして「戦後七〇年」にあたる今年にかけ、この「戦争の一〇〇年」——あるいはこれ以前の戊辰戦争・西南戦争といった内戦や、対外戦争の端緒となった明治七年（一八七四）の台湾出兵以後の「近代の戦争」——を総括しようとする試みが関連の学会や誌上においていくつも行われている。

これら「近代の戦争」とその時々における宗教界とりわけ仏教各宗派および国家神道が、戦前・戦時下におけるイデオロギー形成（「真俗二諦」論等）や組織編成（戸籍管理等）に一定の関与を行ってきたことは周知の事実であろう。その関与の実態については、歴史学・思想史学・仏教学等の各研究領域からの考究が進んでおり、直近の研究成果で言えば、信楽峻磨氏『真宗教学史』（法蔵館、二〇一一）、小川原正道氏『日本の戦争と宗教 1899-1945』（講談社選書メチエ、二〇一四）等があげられようか。

しかしながら、当然、近世期以前の日本も数多の内戦・対外戦争を経てきており、その当時の宗教界の関与についても厳密な文献学的検討が行われてきている一方で、上記のような「近代」についての知見とのすりあわせは、これまでさほどなされてこなかったのではないか。あらためて述べるまでもなく、日本仏教は欽明朝の仏法公伝以降、現在に至るまで、この列島の価値観・思想・儀礼・組織・政経と分かちがたく結びつき続けている。その結合の様をあたう限り通時的に見るための方法の模索、これが本シンポジウムを企画するに至った第一の理由である。

とはいえ、限られた時間の中で「戦争と仏教（あるいは宗教）」という極めて大きなテーマの全体を取り上げることは困難である。議論は要点を欠き、拡散するばかりであるに違いない。そこで本シンポジウムでは、戦争と死者の霊魂という観点を議論の入り口としつつ、「戦争と仏教・宗教」との関係をとらえかえすこととしてみたい。

戦争の諸段階を仮に開戦前夜・戦時下・戦後処理時に分けてみるとするならば、戦死者の霊魂を鎮撫し、顕彰すること、またその生前の営みを言語化・可視化することは、「戦後」を構築してゆく者たちに課せられた最も重要なテーマの一つであると言ってもよいだろう。この点、真つ先に想起されるのが「靖国」であろうが、この種の問題が為政者と戦死者というレベルのみに留まらないう、国家・共同体の全体に関わるものであることは、軍記物語や芸能研究をはじめとした文学研究における成果はもちろん、民俗学・文化人類学的観点からも理解されるところであろう。この問題はあくまでも一例にすぎないが、戦争と戦死者の「鎮魂」、そこへの宗教（あるいはその言語活動）の関与という観点について、通時代的・複眼的視点から検討を行いたい。

上記のような企画をもって開催する本シンポジウムでは、各領域においてきわめて顕著なご業績をあげられている三名の研究者をパネリストとしてお招きする。それぞれのご関心から、戦争と宗教、戦争と死者の霊魂という観点について、ご発題をいただきたい。その上で、コメンテーターとご参集いただいた方々とをまじえた討議によって、フロア全体でこの課題についての新たな知的地平が開かれればと思う。節目となる年の初秋、多数の方々のご参集を期待する。